

タンデム学習の意義と可能性

小林 浩 明

(国際教育交流センター)

キーワード

タンデム学習 学習者オートノミー 互恵性 地域日本語活動

要 旨

本稿は、日本国内におけるタンデム学習の現状を概観し、その意義と新たな可能性を考察した。先行事例の中には、タンデム学習の原則である互恵性と学習者オートノミーに沿っていない授業実践が見られたものの、E タンデムが外国語環境における授業をオーセンティックに変えることができる。また、タンデム学習の原則が地域日本語活動における「教える・教えられる」関係を変えられる可能性を指摘した。

1. はじめに

第二言語教育・外国語教育におけるタンデム学習とは、タンデム（シート）から想像されるように、簡単に言えば、異なる母語話者が二人でそれぞれ相手の母語を学ぶ学習のことである。1990年代半ばに国際タンデムネットワーク（International Tandem Network）¹が設立されて以降、また、ICT技術の進歩とインターネットの普及を背景として、全世界的な広がりを見せているのに対して、日本国内における注目度は極めて低いと言わざるを得ない。

その要因の一つには、タンデム学習が「異なる母語話者が二人がペアとなって…」と聞けば、筆者と同様に「言語交換（language exchange）」や「（言語）交換レッスン」を思い浮かべる人が多いからだろうか。筆者が今学期（2015年度第2学期）に初めてタンデム学習プロジェクトに参加する学生にガイダンスしたところ、ある学生が「わかりました！ お互いに教え合おうですね。」と言い換えたことにも象徴されるように、特段新しい学習だとは認識されない。

しかし、タンデム学習とは、「互恵性」と「学習者オートノミー」の2つを原則とし、異なる言語をそれぞれ目標言語とする母語話者がペアを組み、パートナーになった相手の人物や文

化を知り、互いの目標言語力が向上するように助け合う学習方法である (Brammerts&Little 1996)ⁱⁱ。一方、言語交換は、A 言語を学びたい B 言語母語話と B 言語を学びたい A 言語母語話者が会話をする中でそれぞれの母語を教え、相手の母語である自分の目標言語を学ぶものである (森村他 2012)。つまり、助け合って学ぶ「学び合い」志向のタンデム学習は、教えて学ぶ「教え合い」志向の言語交換・交換レッスンとは趣を異にするので、そもそも両者は似て非なるものであり、大きな誤解が潜んでいることが窺えるⁱⁱⁱ。それでは、なぜ「学び合い」志向のタンデム学習が「教え合い」志向の言語交換・交換レッスンと似たものとして捉えられてしまうのだろうか。

そこで、本稿では、まず、日本国内におけるタンデム学習の現状を、インターネット検索を利用して調べることにする。次に、先行事例を考察することで、実践の面からタンデム学習の意義を考える。さらに、タンデム学習の可能性を地域日本語活動における「教える - 教えられる」関係に対する批判言説を分析した許 (2011) を参考にして、タンデム学習こそ「教える - 教えられる」関係を変えられる可能性を示したい。

2. 日本国内におけるタンデム学習の現状

2.1. インターネットから見るタンデム学習の現状

第2節では、インターネット検索エンジンであるヤフーと、国立情報学研究所の学術情報検索データベース・サービス CiNii を利用して、日本国内におけるタンデム学習の現状を、言語交換・交換レッスンと対比的に紹介する。

2.1.1. 一般的なインターネット検索エンジンの場合

検索エンジンのヤフーを利用して、「言語交換」でキーワード検索すると約 131 万件が、「交換レッスン」でキーワード検索すると約 1,190 万件がヒットする。これに対して、「タンデム学習」では約 34 万 4 千件である。つまり、「言語交換」と比べた場合、その差は 4 倍以下ではあるものの、「交換レッスン」と比べた場合には、約 35 倍という大きな開きのあることがわかる。

次に、検索された 1 ページ目を比較してみよう。「言語交換」と「交換レッスン」の 1 ページ目は、交換レッスン参加者を募集するサイトがほとんどであるのに対して、「タンデム学習」の場合、大学で実施されているプロジェクトやその実践報告であり、アカデミックな世界に限定されていることがわかる。

2.1.2. 学術的な CiNii の場合

学術情報検索データベース・サービス CiNii を利用して、「タンデム学習」をキーワードとして検索するとわずかに 3 件しか出てこない。そこで、より多くの論文等がかかるようにキーワードを「タンデム」と「学習」に分けて検索しても、わずかに 5 件しか出てこない。

一方、「言語交換」では、わずかに 2 件が検索されたが、「交換レッスン」では皆無という結果になった。

2.1.3. タンデム学習と言語交換・交換レッスンの関係

タンデム学習という用語は、アカデミックな世界で出現するのに対し、言語交換・交換レッスンという言葉は、一般的な世界でよく使われることがわかった。したがって、タンデム学習には、専門的な見地からの定義が行われているが、言語交換・交換レッスンについては、おおよその説明はあっても、厳密な定義は存在しないのかもしれない。

2.2. 先行研究

日本語教育の専門書では、タンデム学習を見つけることができなかった。しかし、ドイツ語教育の方では、吉島・境 (2003) 及び岩崎 (2011) では、数ページに渡ってタンデム学習の説明及び紹介があるものの、具体的な実践報告までは行われていない。一方、ICT を活用した外国語教育の専門書の中で、徳永 (2008) が日本語と英語の E メールによるタンデム学習の事例を紹介している。

しかし、「タンデム」という用語を用いながらも、独自の定義を行っているために、タンデム学習とは言えない事例もあった (板倉・中島 2001、中島・板倉 2003、太治 2006)^{iv}。

さらに、筆者がわずかながら先行研究他で探したところ、2010 年以降にわかに実践が報告されるようになってきたことがわかる (仁科 2010、大河内 2011、福地 2011、脇坂 2012 ; 2013、青木他 2013、林他 2013、山本 2013 ; 2014、上杉 2015)。いずれにせよ、極めて限られた数の実践報告しか見つけることができなかった。

2.2.1. 対面式タンデム学習の先行事例

対面式タンデム学習については、わずかに 4 事例しか見つけることができなかったが、いずれもタンデム学習の定義に沿った実践である。特に、青木他 (2013) は、組織的に取り組まれた初めての事例であろう。表 1 は、各事例の概要を整理したものである。

表 1 対面式タンデムの先行事例

	目標言語	位置付け	期間	コーディネーター	特記事項
山本 (2013) (2014)	日・英・韓・中・ 仏(留学生) 英・韓・仏・独・中・ 他(一般学生)	授業外自主的 参加のプロ ジェクト	定め なし	著者・個人	随時登録制。 ガイダンスあり。 ペアで自由に学習。 相談可。 仏のみ E タンデム。
青木他 (2013)	日本語(18) 英語(6)、中国 語(3)、独語(2)、 仏語(2)、葡語(1)、 伊語(1)、越語(1) *1学期目	授業外自主的 参加プロジェ クト	学期 継 続 可	文学研究科・文学部 日本語教育学教員 大学院生 RA 大学院生 SS 学部生アルバイト	留学生と日本人学生の交 流促進及び、日本人学生 の留学に対する積極的態 度の育成 ガイダンス 学習の日記 参加者親睦パーティ
大河内 (2011)	日本語 (日本学専攻) ドイツ語 (ドイツ語履修)	日本学専攻学 生のための短 期研修	1 週 間	著者・個人	研修期間4週間のうち最 初の週のみタンデムプロ グラムを実施。他3週は 日本語授業。 半日単位でパートナーを 変えた。
脇坂 (2011)	日本語 (日本語専攻) 英語 (工学専攻)	授業外の自主 的なプログラ ム	約 3 ヶ 月	著者・個人	著者が行ったプロジェク トの中から1組を選んで ケース・スタディを行い、 互恵性が学習者オートノ ミーを高めることを明ら かにした。

2.2.2. E タンデムの先行事例

E タンデムの先行事例としては、対面式タンデム学習よりも多く、6 事例を見つけることができ、表 2 に示した^v。脇坂 (2013) 以外は、授業として位置付けられた実践であり、目標言語がクラス毎に統一されているのがわかる。また、時代が新しくなるにつれ、E メールという文字のみのツールから、Skype というカメラを通して対面できるツールを使用した取り組みが増えている。つまり、E タンデムとは言え、対面式タンデム学習に近い状態で学習することが可能になった。

表 2 E タンデムの先行事例

	目標言語	位置付け	期間	コーディネーター 及びスタッフ	特記事項
上杉 (2015)	日本語 英語	授業 (成績評価あり)	1 年間	授業担当教員	Skype 語学研修のための準備 日 NS 2 対英 NS 1 話題指定のある回とない 回がある
林他 (2013)	日本語 ドイツ語	会話授業 (成績評価あり： 口頭試験)	4 か月	授業担当教員	Skype 毎週 30 分をどちらかの 言語で 課題を教員が指定 学習記録
脇坂 (2013)	日本語 ドイツ語	独：単位付与 日：授業外自主参 加プロジェクト	5 週間	独：言語センター 日：著者・個人	E メール及び Skype 事前設定の話題テーマ サポートあり ケース・スタディを用い てドイツ人日本語学習者 の動機変化を分析した
福地 (2011)	スペイン語 (第二外国語) 日本語 (語学センター)	授業 (成績評価あり)	45 日間	授業担当教員	Eメールの交換は授業外 で実施
伊東他 (1998) ^{vi}	英語 日本語	授業	3 回 ／ 自由	授業担当教員	Eメール、互恵性 3名のメール交換グルー プ(日：1名と英：2名) ／2対2 指定トピック／自由に授 業外の時間に
中島 (1993) ^{vii}	英語 日本語	作文授業	2 か月	授業担当教員	Eメールで一括送信 話題・内容・文体は教師 と話し合って決める 作文(教師の添削あり) 手紙(自由)

授業としてタンデムの実践を行う場合、その性質上、全員が参加することを前提とするために、必ずしもペアでの学習にはなっていなかった。欠席者がいたり、通信の不調があったりする場合には、その都度ペアの変わる可能性もある。また、あらかじめ課題が設定されていたり、話題が決まっていたりすることも多く、授業外でのタンデムに比べると、学習者の決められ

ることが限られている。概して、授業でのタンデムは、ペア・ワークやグループ・ワークとして捉えられているようであり、互惠性の原則には適っていても、学習者オートノミーが発揮しにくいと言えよう。言い換えれば、学習のコントロールは、授業を担当する教員が行い、学習者はその枠組みに従っている。

2.3. 日本におけるタンデム学習実践の特徴

ここまで先行事例を見てきたが、一部の事例を除けば、互惠性の原則には適っていても、学習者オートノミーの原則からは、大きく外れる実践の多いことがわかった。また、「タンデム教育」(上杉 2015)という言葉まで生まれており、タンデム学習の広がりが懸念される。

3. タンデム学習の意義

グローバル化が進む現状では、日常生活において使用することのない外国語環境であっても、実践的なコミュニケーション能力を求められている。しかし、いくら国際交流が活発となり、交換留学や派遣留学の枠を増やしたところで、全体から見れば実際に利用できるのは限られた一部の学生に過ぎない。また、留学生の受入数を増やすことでキャンパスをグローバル化する必要もあるが、現状1割にも満たないのであれば、道のりは遠い。

ここでもう一度タンデムの定義を見てみよう。2013年に増補改訂された『ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典』によると、「タンデム学習 (tandem learning)」は、以下のように説明されている。

二人の人が、それぞれの言語と文化の知識に長けていて、定期的に会って交流したり情報交換したりするだけではなく、お互いの言語と文化について学んだりするような状況をいう。それぞれのパートナーは、自分自身の学習に責任を持ち、何をどのように何時学ぶべきかを決定する。通常、これは言語コースの正式な指導の補完となるものである。このような学習がインターネットを通して行われる時には、イー・タンデム学習と呼ばれる。(p.470)

ここでは、正課を補うための課外学習としてタンデム学習が位置づけられているが、2.2. で見たように、正課として既に実施されている場合もある。特に、ICT 技術の進歩と普及により、E タンデム学習においても、対面式タンデム学習と同じように同時性と視覚音声コミュニケーションが可能となったことで、正課として実施しやすくなったことに加え、外国語環境におけ

る授業をオーセンティックなものに変えることができる。また、脇坂（2013）によれば、タンデム学習が外国語学習における動機付けの維持に貢献するので、日常生活の中ではニーズを感じにくいヨーロッパ言語を学習する助けとなることも期待されるだろう。

4. タンデム学習の可能性

4.1. タンデム学習の説明に見える「学ぶ」と「教える」

先行事例を見てみると、厳密にはタンデム学習とは言えないものがあることがわかってきた。双方向性があり、互恵的であれば、タンデムと呼んでいるようである。また、タンデム学習に関する記述の中では、「教えること」と「学ぶこと」が言い換えられていることがわかる。以下に示す通りである（下線は筆者によるものである）。

「一種の交換教授ですが、(略) 両者のそれぞれの言語学習を助ける。(略) ペアを組んだら、それで教師の役割はお終いというわけではありません。(略)」(吉島・境 2003 : 226-227)

「相互学習であり、自分が教わると同時に、自分も相手に教える。」(仁科 2010 : 81)

「それぞれが、相手の先生役をして、お互いに助け合わなければいけない。(中略) よって、日本人は日本語をそしてスペイン人はスペイン語を互いに教えあわなければいけない。」(福地 2011 : 47)

「タンデム教育とは、異なる言語を母国語とする2人がパートナーとなって、互いの得意な言語をそれぞれが学び合うという学習方法である。」(上杉 2015 : 67)

「交換教授」「学習を助ける」「教師の役割」、「相互学習」「教わる」「教える」、「先生役」「助け合う」「教え合う」、「教育」「学び合う」「学習方法」が無造作に使われていることがわかる。「学習」は「教わる」と、「学習を助ける」は「教える」と同じであろうか。

学習から見た場合、教えることは学習の必要条件とはならない。青木（2001）では、「教師の仕事についてのよくある誤解」として、2つの指摘をしている。

- ① 社会的位置づけを背景にした力で学習を引き起こすことはできない
- ② 教師のもっている宣言的知識を言葉で表現したり、手続き的知識を行動によって披露したりすることで、学習者の頭の中にそれを転移することはできない。

(青木 2001 : 186-189)

「教師らしく振る舞うこと、説明すること、手本を見せることなど、一般に教師の仕事だと考えられていることを教師の仕事だと考えてはいけない（青木 2001：189）」というのは、一般に「教える」と考えられている行為が、「学ぶ」という行為に直結しないということである。それでは、なぜ「学ぶ」と「教える」が同列に扱われているのだろうか。

4.2. 地域日本語活動の課題

地域の日本語教室における「教える - 教えられる」関係に対する批判がある（森本 2001、杉原 2010）。日本語教室が、日本語を学ぶ人のために存在意義があると考えるのであれば、「教えられる」という受動的な立場にいる日本語を学ぶ人よりも、「教える」という能動的な立場にいる日本語を教える人のための場となってしまう。そこに、「日本語を教える人＝日本人」、「日本語を教えられる人＝外国人」という構造が組み込まれると、日本人対外国人の非対称的な力関係が日本語教室によって強化されてしまうことになる。むしろ、ここでは、日本語を学ぶ人が主体となれるように、「学ぶ - 学びを支援する」関係の方が望ましいだろう。

しかし、「学ぶ人＝外国人」、「学びを支援する人＝日本人」となってしまえば、先の「教える - 教えられる」関係と同じく、非対称的な力関係のままである。つまり、言葉を言い換えただけのことになってしまう。このような二項対立的な「教える - 教えられる」関係をめぐる批判言説を考察した許（2011）は、「教える - 学ぶ」関係を提唱している。「教える - 学ぶ」関係は、「教える人＝日本人」「学ぶ人＝外国人」という非対称的な力関係を解消することにはならないが、「教える」と「学ぶ」の間には、両者の能動性を前提としており、「互いが合意に至るまでの調整を行う動的なプロセス」（許 2011:63）のため、「教える」側が常に優位に立つとは限らないと主張する。

4.3. 課題の解決に向けて

しかし、既に 4.1. で見たように、「教える」と「学ぶ」を厳密に使い分けていない現状があり、許（2011）の主張する「教える - 学ぶ」関係では、「教える - 教えられる」関係にすり替わってしまう可能性がある。そして、非対称的な力関係が保持されている限り、「教える - 教えられる」関係が維持されてしまうだろう。つまり、問題は「教えられる」か「学ぶ」という能動性にあるのではなく、非対称的な関係の方を変えなければならないのである。その際、「学び合い」関係のタンデム学習が有効だと考えられる（脇坂 2012）。

まず、「互恵性」の原則に立てば、非対称的な力関係が解消され、互いに対等な立場で役割を交代しながら、学習したり学習の支援をしたりすることが可能になる。

そして、「学習者オートノミー」原則によって、言語学習の能動性は学習する側が保持する

ことになるため、「教える」側の人が存在しなくなるのである。

既に、青木他(2013)では、チューター制度によるサポートに代わって、タンデム学習プロジェクトを導入し、参加者からの肯定的な評価を得ている。チューター制度と地域日本語活動には相違点も少なくないが、「教える - 教えられる」「支援する - 支援される」という非対称的な関係がもたらす課題は共通しているので、地域日本語活動の課題解決に向けてタンデム学習は大いに期待できると考える。

5. おわりに

本稿では、日本国内におけるタンデム学習の事例を概観し、その意義と新たな可能性を考察した。タンデム学習は、類似する言語交換・交換レッスンが一般的に使用されているため、厳密な意味での理解がされていない可能性もあるが、互惠性と学習者オートノミーを原則とするタンデム学習こそ、地域日本語活動が長年抱えている「教える - 教えられる」関係を変えられることを見出した。

しかしながら、タンデム学習が日本国内で発展していくためにはいくつかの課題も散見されたので、今後の課題として以下に示しておく。

- ① 教師・コーディネーターの果たす役割の重要性
(伊東他 1998、仁科 2010、福地 2011、林他 2013)
- ② タスクを共有するためのデータベースの構築 (仁科 2010)
- ③ タンデム学習支援のツール開発 (仁科 2010、青木他 2013)
- ④ タンデム学習に適した学習リソースの開発 (仁科 2010)

参考文献

- 青木直子 (2001) 「教師の役割」『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- 岩崎克己 (2010) 『日本のドイツ語教育と CALL - その多様性と可能性』三修社
- 許之威 (2011) 「なぜ、日本語を「教え」てはいけぬのか - 地域日本語活動における「教える - 教えられる」関係に対する批判の再考」『人間・環境学』20号、57-65
- 杉原由美 (2010) 『日本語学習のエスノメソドロロジー - 言語的共生化の過程分析』勁草書房
- 森本郁代 (2001) 「地域日本語活動の批判的再検討 - ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」野呂香代子・山下仁編『「正しさ」への問い - 批判的社会言語学の試み』三元社
- 吉島茂・境一三 (2003) 『ドイツ語教授法 - 科学的基盤作りと実践に向けての課題』三修社
- 吉田晴世・松田憲・上村隆一・野澤和典編・CIEC 外国語教育研究部会 (2008) 『ICT を活用した外国語教育』

タンDEM学習の意義と可能性

東京電機大学出版局

リチャーズ、J.C.・シュミッツ、R. / 高橋貞雄・山崎真稔・小田眞幸・松本博文訳 (2013) 『ロングマン言語教育・応用言語学用語辞典』 南雲堂

<タンDEM学習の実践に関するもの>

青木直子・脇坂真彩子・欧麗賢 (2013) 『2012 年度タンDEM学習プロジェクト報告書』 大阪大学大学院文学研究科・文学部国際交流センター

伊東治己・Yoko Azuma PRIKRYL (1998) 「E-mail を利用した異文化間コミュニケーション授業の試み - 日本の英語教育とカナダの日本語教育の連携を軸に」 『奈良教育大学紀要』 第 47 巻第 1 号、105-122

板倉ひろこ・中島祥子 (2001) 「IT 時代における日本語教育 - 香港・鹿児島間の電子メール双方向型プロジェクトワークの試み」 『世界の日本語教育 (日本語教育事情報告編)』 6 号、227-240

上杉裕子 (2015) 「スカイプを利用した英語・日本語遠隔タンDEM教育」 『日本教育工学会研究報告集』 15 (2)、67-74

大河内朋子 (2011) 「タンDEMプロジェクトの実践報告 - コース設計とその成果」 『大学教育研究 - 三重大学授業研究交流誌』 19 号、1-6

太治和子 (2006) 「フランス語タンDEMコミュニケーションクラスについて」 『関西大学外国語教育フォーラム』 5 号、69-79

徳永あかね (2008) 「日本語教育と ICT」 吉田晴世他編 『ICT を活用した外国語教育』 東京電気大学出版局

中島和子 (1993) 「パソコン通信を活用した日本語教育 - 「書く力」を中心に」 『日本語学』 第 12 巻第 13 号、22-30

中島祥子・板倉ひろこ (2003) 「日本語学習者と母語話者の異文化理解の形成 - 電子メールプロジェクトワークを通して」 『異文化間教育』 17 号、87-95

仁科陽江 (2010) 「タンDEM学習の実態と対策 - 成功する自律相互学習のために」 『日本語教育連絡会議論文集』 Vol.23、80-90

林良子・杉原早紀 (2013) 「スカイプを利用した日本語・ドイツ語遠隔タンDEM授業の実践」 『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』 41 号、44-54

森村久美子・エントジガー、ヨルク・鈴木真二 (2012) 「国際コミュニケーション力養成のための M-Skype」 『工学教育研究講演会講演論文集』 60 号、396-397

山本冴里 (2013) 「山口大学多言語化プロジェクトの現状と課題 - Language Exchange プログラム《Tandem》を中心に」 『大学教育』 10 号、54-66

山本冴里 (2014) 「Tandem 活動は複言語主義の促進に結びついたか - 山口大学の事例から」 『日本語教育連絡会議論文集』 Vol.27、1-10

脇坂真彩子 (2012) 「対面式タンDEM学習の互惠性が学習者オートノミーを高めるプロセス - 日本語学習者と英

- 語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』24号、75-102
- 脇坂真彩子 (2013) 「E タンデムにおいてドイツ人日本語学習者の動機を変化させた要因」『阪大日本語研究』25号、105-135
- Bauer, Tobias. 2006. Fremdsprachenlernen im Tandem : Überlegungen zu den Möglichkeiten der Lernform “E-Mail Tandem” im Rahmen des Deutschunterrichts für Anfänger an einer japanischen Universität. (トビアス、バウアー「タンデムによる外国語学習 - 日本の大学での初修ドイツ語授業における教授法「Eメール・タンデム」の可能性についての一考察」『文学部論叢』90号、39-57
- Brammerts, H. & Little, D. (Eds.) 1996. *Leitfaden fuer das Sprachenlernen im Tandem ueber das Internet. Manuskripte zur Sprachlehrforschung*. Bochum: Brockmeyer. (糸魚川修・新田誠吾・中祢勝美・志村恵・竹内義晴 (1998) 『インターネットによるタンデム学習のための手引き』 <http://www.cisi.unito.it/tandem/email/org/nih/LEITFADEN.html>)
- Trummer-Fukada, Stefan / Masuda, Yoshikazu / Sugihara, Saki / Hayashi, Ryoko (2013) Kursunterstütztes “Skype-Tandem” und die Möglichkeiten selbstbestimmten Lernens in institutionell durchgeführten Sprachkursen : Zum japanisch-deutschen Tandem Projekt an den Universitäten Hamburg und Kobe. (「大学実施会話コースにおける Skype タンデムコースの参加者支援と学習者の自己決定の機会 - ハンブルグ大学と神戸大学での日本語・ドイツ語タンデムプロジェクト」) 『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』9号、1-18

注

- i 英語のトップページ <http://www.cisi.unito.it/tandem/email/idxeng00.html>
- ii 糸魚川他(1998)では、「相互原則」「自律原則」と翻訳されているが、本稿では、脇坂(2012;2013)の「互惠性」「学習者オートノミー」を使用する。
- iii 山本(2013;2014)では、language exchange を tandem と言い換えている。
- iv 板倉・中島(2001)及び中島・板倉(2003)では、日本語母語話者(鹿児島)と日本語学習者(香港)の双方向型プロジェクトワークであり、使用言語は日本語のみである。また、太治(2006)では、フランス語母語話者教員と日本語母語話者教員が同一教材を用いて交互にフランス語の授業を行ったものである。
- v Bauer(2006)及びTrummer-Fukadaetal(2013)は、ドイツ語で書かれた論文であるので、ここでは、論文名のみ和訳に留めたい。
- vi タンデムという用語を使っているわけではないが、互惠性を重視し、学習者と学習支援者の役割を交代で担っているという点でタンデム学習であると判断した。特に、2年目の実践では、授業時間外に自由にEメール交換を行っている。
- vii タンデムという用語を使っているわけではないが、互惠性があり、双方向の「自主学習型」学習を目指している。